

とも一石を下し候に、一手毎に三百六拾手宛有之事を工夫
 仕、詮議を極置候て打申候。四方八面何方にても有所毎に、
 三百六拾手候。若盤上に三百六十一目有之基盤有之候は
 ど、其時は不及是非候。三百六拾目にさへ極り候はゞ、何
 時も此方勝理窟に候。家兄此話を聞て云。基盤の目は三百六十一目有之候。此理窟は能て致工夫置候。此所之語三百六十一目と
 作して可也と云。愚云。目は路也。朱子語類九十五卷
 基盤三百六十路とあり。三百六十一路には無之。可也。先づか様には候へ
 共、爰には人品の入申事候。圍碁の理窟を極候は某と同位
 に候處、相手、某より人品すぐれ候て、勝負の際に臨て聊
 もせき申氣味無之、且又氣根至極強候て、草臥申儀少も無之
 者に候はゞ、其者勝可申候。乍然是も大なる違は無之、唯半
 石の強みと可存候と申候。面白申様に候。詩も又如斯の旨
 被申候。於此先生發明有之候。堯舜湯武皆聖人也。然共湯
 武を以堯舜に比れば、未盡善の所あり。湯武の時に當て堯
 舜出給はゞ、征伐を用ひ給はずして天下自然と堯舜の天下
 と成べし。こゝは人品による所なり。是湯武は半石の弱み
 あり。理窟迄にては湯武の征伐も、堯舜の揖讓も共に道理
 に叶へり。同一聖人なれども於是不同ある事は、人品の上
 にあり。某其は堯舜湯武は過所之時異なれば、其事も亦異
 也とのみ可申所に、先生之發明則然たる事に候。天下の道理程朱

に至て極矣盡矣。性の一字を説ては本然の性、氣質の性を
 以て説盡して復餘蘊なきが如し。然共聖人有之出給はゞ、
 其氣象格別ならん。爰は彼人品の入處なり。
 一、擬願命と題せる一小冊の事
 此間林家の門人、擬願命と題せる一小冊を刻行す。林氏の
 歴々各序跋を加て褒美す。願命の二字を以て之を思へば、
 文昭公の御遺詔などを、刊行も仕たるかと思はる。左様に
 候ても、京師精神家など不快に可思やなどと申合へり。然
 處擬願命を聞すれば、己が母の臨終の遺言を載たる書也。
 剩へ念佛して臨終せる由を記す。誠に好笑々々疎末の至
 に候。
 士大夫臨終之遺命をも願命とするす。但漢書に多見えた
 り。
 一、芳齋青木新兵衛の事
 青木新兵衛は方齋入道とも三代つゞくか。方齋は渡り奉公
 せし人か可尋。越前少將忠直卿是は一伯殿也。孫門秀頼に被召仕。
 實軍昭宮の孫たり。就夫物語有之爲證據記之。越前忠直之臣永見主膳、子息鑑
 の着初を三宿勘兵衛に頼む。勘兵衛は名高者。故秀頼の御抱守にて御足
 藏之處、忠直代に成賞版も無之に付、不足

中根を乞、散々の首尾に構成取給。是を遺恨に思ひ大段に籠城し、吾此軍御利運に於
 ては、越前を可給と約束し、自ら三宿越前と稱し忠直の手に向ひ戦死す。忠直の臣西尾
 仁左衛門、三宿を討取と。但野木右近討取か。其時一座に有合若き衆、勘兵衛へ武功の
 咄を望む。卑下して不語、強て望ければ某一生の内ゆゑ、勝
 敵に出合事あり。何所の合戦と聞ければ失念也。某曾て聞。越前合戦の時
 云は湖水の。戰場日既に暮れ互に引取所に、健なる敵一人來る。
 予も立向しが敵曰。今朝より雜人原を突て鐘先けがれた
 り。少待給へとて澤水にて鎗先を洗落、青木新兵衛と名乗
 懸る。予も名乗り突合けれども、五無勝負内日没しぬれば、
 後日に參會仕らんとて相引に退く。か様潔き武者は外には
 又も不見と云。其時勝手の者共、次の間に伺候して聞ける
 其中に、常々主膳方へ出入の浪人あり。是も其日勝手に
 働けるが、此物語を聞て其座中へ出る。傍人とゞめけれど
 も不聞入、進出て云やうは、扱もく珍敷人に出合たり。
 其鎗の相手は某也とて、其時の様子互の鎧の色以下、物語
 するに符合せり。是より青木が武名露顯し、則忠直へ被召
 出。是方齋也。岡部自休入道は忠直の時、町方・郡方・公事方
 様々の奉行兼役にて出頭す。然るに自休が領知の百姓の女
 を、布施但馬が領知の百姓に嫁す。一年相馴て後、夫が用

事有て佐州へ行けり。三年迄不歸。定て死たりと思ひ、其
 妻は近所へ再縁して子を産す。其後先夫佐州より歸り、妻
 の事を聞て代官所へ訴ける所に、自休郡方公事場勤けれ
 ば、堪忍せよとて理非も不糾年も暮ぬ。明年正月彼舅百姓
 方へ、婿及一門共を朝拜に招ける處、但馬聞之、夜潜に人
 をして舅の家の廻りを燒草を積、火を發て一人も不殘焚殺
 す。忠直聞給ひ大に怒て諸方に札を立、訴人あらば黄金十
 五枚可賜と也。此時但馬が家僕中野長兵衛と云もの、連々
 但馬に恨ありて、此事を訴へ恨を報いんと思ひ其妻に語
 る。妻聞之様々異見すれども、不聞して自休方へ行。妻思ふ
 は不義ゆゑ利なき子供まで失ん事不便也とて、但馬方へ行
 き長兵衛訴人に出る事を告且言く、か様に申上るは子供御
 助命の願也と云。尤也とて頓て長兵衛を捕へ座敷へ押込
 置。長兵衛調儀を以て夜中遁出。番人追懸ければ塀を越え、
 近所の牧野主殿宅へ走入。追手者斷けれ共不出。隣家竹島
 周防は主殿が舅故、是へ遺所に周防下屋敷へ遣し長兵衛を
 殺害す。扱此越忠直聞給ひ大に怒り、遂に布施但馬は自殺。
事長き故此儀駿府へ聞え、家康公大に怒給ひ、自休が進退も